主題から主語へそして主語から主題へ

――「ハ」と「ガ」

アンドレ・ヴロダルチック

序

言語系統の地図に於いて、特殊な位置を占める日本語は、一般言語学の諸論をおしすすめるための多くの研究要素を現代に与える言語である。後にあげる問題は、先験的推理により生まれたものではなく、多数の帰納的推理の結果、即ち、言語現象自体の考察、また、既存の研究に関する考察に基づくものである。

一　ハとガの対立に関する既存の解釈

A　**〔ハ／ガ〕の解釈**　これは相関的対立の考え方に於いて、ハとガはパラディグマティックな関係をもつ二つの助詞であると仮定するものである。その助詞の働きの性格は、時には両側的(apparié)（ハが総主語であり、ガが小主語である場合）、時には非両側的(non apparié)（ハが主題で、ガが主語である場合）として解釈される。

B　**〔ガ×十ハ〕の解釈**　これはパラディグマティックな関係を認めるのではなく、消去的観点に立って助詞ガはハの前で必然的に消去されると仮定する考え方（SZ《＝ZP 名詞句》が文の主語の役割を持つ場合）。



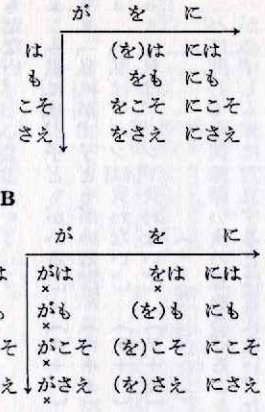
この異った二解釈は、次の共通点を所有している。即ち、係助詞と格助詞との従来の区別は、確立されたものとして扱っていることである。一方、この二解釈は次の点で異る。即ち、

(a)　解釈Aはパラダイムの研究に基づき、解釈Bはシンタグムの研究に基づいている。Bの考え方は、ハとガの形態統辞論的な働きと、大部分の係助詞、格助詞の働きとの類似性に基づいている。この類似性は、日本語に於いて、助詞が膠着的な性格をもっている、という事実に関する問題である。

(b)　解釈Aは、従来の国語学の研究に基づくものであり、Bは変形生成文法論に基づく、より現代的な考え方である。

解釈AとBの大きな区別は、後者の主張者が形態的なハダカ格、又は、名格の消去を認めるという立場より生まれるものであろう。

図 1



表の軸はそれぞれ〔係り〕及び〔格〕を示す。

二　二次的な両側的対立

C　**〔ハ⇄ガ〕の解釈**　筆者がここで提案しようとする解釈は、〝二次的な両側的対立〟[1]を仮定することから始まる。即ち、現代日本語において、ハのガに対する対立の仕方は、ガのハに対する対立と逆であるとするものである。[2]

〔ハ／ガ〕の解釈に関し、解釈Aで述べた格助詞と係助詞との区別のほかに、更にいくつかの別な解釈をあげてみたい。

松村明[3]によると、ハは述語を支配する主語を表わし、ガは述語に支配される主語を表わす。

また、主語と述語のもつ関係の種類に関して尾野秀一[4]の別な解釈をあげることができる。

ハ→an essential and inevitable relationship（本質的かつ必然的な関係）

ガ→a temporary or irregular (accidental) relationship（臨時的または不規則的（偶然的）な関係）

最近よく知られるようになった久野暲の理論[5]によると、ハは主題を表わし、更に対照（筆者は対比と呼ぶ）の意味をもつ。また、久野は、主題としてのハの働きに於いて、総称と文脈指示という意義相を強調している。

解釈AとCは、共に、助詞ハとガの相関関係を出発点としているが、解釈Aが、ハは係助詞の典型、ガは格助詞の典型としてだけ扱っているのに対し、解釈Cは、ハとガは大部分に於いて同じ働きをもつ要素として扱っている。確かに解釈AはCに比べ、より〝広い〟視点をもっているが、実際は、このような研究の結果が、必ずしも解釈Cより現代日本語の真実に、より適しているとはいえない。なぜなら、〝狭い〟視点が日本語のいくつかの特徴を明らかにし、変動的(ダイナミック)共時態を引き出すからである。結局、ハは一方でガに、他方でモに対立し、ガは一方でハに、他方でヲに対立すると考えられる。解釈Cを図表で表わすと、後に示す図6（結論）のようになる。

解釈Bの消去の基礎に立った考え方によると、

(1) a「雨も降っている。」という文は

(1) b（雨が×＋も降っている。）と解釈できる。

(2) a「雨も降る。」という文を説明する必要があるならば、

解釈Bの主張者の考え方に従うと、

(2) b（雨が×＋は×＋も降る。）

と、解釈できるだろう。なぜなら、解釈Bでは、ガは主語を、

ハは主題を表わし、文(2)の深層構造には、「雨も」に主題化された主語の働きがあるのでガ（主語）とハ（主題）とを消去しなくてはならないからである。この場合、いうまでもなく、モは副助詞として扱う。

それに対し、解釈Cは、ハを主題、ガを主語としてではなく、両者が主題と主語の二つの機能をもつ助詞として解釈するものである。つまり、文法上の形態成分ハとガは、主題、主語という文法指示子としての役割の区別をもたなくなった。従って、厳密な形式的（形態論的）レベルではなく、文の意味のレベルに於ける主題と主語の働きを追求しなければならない。

ガが主題としての機能をもつのは、かなり限定された場合である。ハが格助詞に続かない場合（ハが「ヲ＋ハ」の結合を示す場合も含む）を除き、ガがハに対立していなければ、主題としての役割をもたない。

(3) a 「私には、子どもがいる。」（ニ＋ハ）
(3) b * 「私にが、子どもがいる。」（ニ＋ガ）
(4) a 「私は、パンは買わない。」（ヲ＋ハ）
(4) b * 「私は、パンが買わない。」（ヲ＋ガ）
（＊＝非文法的な文）

また、ハに関しても興味深い次の点をあげることができる。つまり、ハが必ずしもガに対立するとは言えない。なぜなら、ハは日本語の歴史上で、特殊な使い方も示しているからである。

(5) 「今日は良い天気です。」

このハは、必ずしも主語或いは主題の機能をもたない。（しかし、この場合でも、主題化ができないわけではない。）文(5)の「今日は」は一つの句として扱わなければならないであろう。

この現象は、フランス語に於ける、時制の状況補語を伴う定冠詞、不定冠詞の問題と比較し得る。

(6) Il fait froid *la nuit.* 夜は寒い。

この場合でも、たとえハとガの対立をたてたとしても、それは決して主題あるいは主語に関する対立ではない。ここで強調したいことは、決してハとガの相違ではなく、両側対立（パラディグマティックな関係をもつ）の中での要素として、ハとガを扱うことができるということである。

三　主題と主語

日本の国語学に於けるハとガの研究に於いても、また、ヨーロッパの一般言語学の研究に於いても、次の二領域が主張されることがある。

Datum/Novum (Vilém MATHESIUS)
既知・未知（大野晋ほか）
旧情報・新情報（生成文法論者など）

筆者の研究は、ハは既知（Datum 又は旧情報 (old information)）の側に、ガは未知（Novum 又は新情報 (new information)）の側に属するということに基づく。実際、右の区別は論理学上の量化 (universal/existential) に近い問題である。量化は論理学上では充分に成されるが、言語学上に於いては、先の二項 (universal and existential quantifiers) だけでは不充分であるので、この二分法を次のように更にこまかくしてみることにする。

図 2

（ハ）既知（旧情報）	5	総称 générique	しかの角は春に落ちる。
	4	一般 général	雨の降る日は気分が悪い。
	3	習慣 habituel	太郎は毎日学校へ行く。
	2	潜在 virtuel	五時には家に帰れる。
	1	前述 anaphorique	太郎は私の友だちだ。
	0		
（ガ）未知（新情報）	1	後述 cataphorique	手紙が来た。
	2	実在 actuel	雨が降っている。
	3	偶有 accidentel	ボールが隣の家にはいった。
	4	特殊 particulier	この頃、近眼がずい分ふえた。
	5	特定 spécifique	木が一列に並んでいる。

一般的に、ハが既知、ガが未知の領域を占める例として次の文をあげることができる。

(7) 船はだんだん遠ざかっていく。
(8) 音がだんだん近づいてくる。

前述の、言語に於ける量化の価値は、ハとガの種々の相違を示す。先の図の価値階級はそれぞれ主題及び主語としての、ハとガの特徴を明確にしている。

主語と述語が、既知あるいは未知の同じ側に属するとき、単純な主述関係をもつ文となる。しかし、主語が述語とは別の側に属するとき、主題化された主述関係の文となる。主題化は既知、未知との対照に基づく談話作用であると定義しよう。このように理解される主題化は、陳述(陳述作用)の第二次産物として存在し、決して統辞論的な (syntaxique) 現象ではない。文の主語にも、補語にも相当しない主題の場合は、その主題の文に対する関係は、並列的 (parataxique) な性格をもっているといえる。[6]

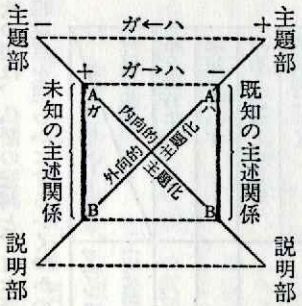
さらに、日本語のハとガの二次的対立の研究は、〝外向的〟(exocentré) な主題化と〝内向的〟(endocentré) な主題化の二つに区別することができる。

また、日本語の特徴は、文の述語が常に説明部に含まれる、ということを強調したい。述語を主題化する場合には、その述語を名詞化しなければならない。

(9) 英語が話せるには（名詞句）話せるが、通訳するまでには（名詞句）いたらない。
(10) 飛んでいたのは（名詞句）コウモリだった。

第三節で述べたことを図表化すると、図3のようになる。

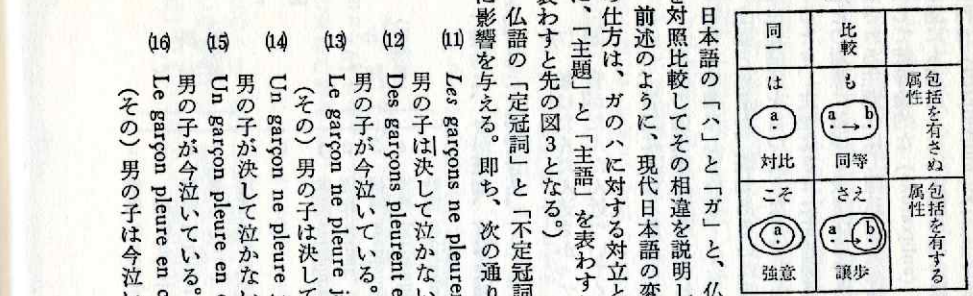
図 3



先で名づけた〝外向的〟〝内向的〟の性格の源は、マテジウスが言ったような、主題は既知、説明は未知ということではなく、主題と説明がそれぞれ、未知となったり既知となったりする可能性である。即ち、説明句がそれぞれ未知であるか既知であるかにより、主題句が既知、未知となる。要するに、主題化作用は既知の主題について未知の何かを述べること（外向的主題化――いわゆる対比的な意味をよくとる）、また、未知の主題について既知の何かを述べること（いわゆる総記的な意味をとる）にある。右に定義された主題化は、範列的な現象を設定するように思われる。

結局、助詞ハは係助詞の一つで、他の係助詞に対して次のよう

図 4



日本語の「ハ」と「ガ」と、仏語の「定冠詞」と「不定冠詞」を対照比較してその相違を説明してみよう。

前述のように、現代日本語の変遷により、ハのガに対する対立の仕方は、ガのハに対する対立と逆である。「ハ」と「ガ」は共に、「主題」と「主語」を表わすことになる。(これを図によって表わすと先の図3となる。)

仏語の「定冠詞」と「不定冠詞」の働きは「主題・説明」関係に影響を与える。即ち、次の通りである。

(11) *Les garçons ne pleurent jamais.* 男の子は決して泣かない。 — 既知の主述
(12) *Des garçons pleurent en ce moment.* 男の子が今泣いている。 — 未知の主述
(13) *Le garçon ne pleure jamais.* (その)男の子は決して泣かない。 — 既知の主題 未知の説明
(14) *Un garçon ne pleure jamais* 男の子が決して泣かない。 — 未知の主題 既知の説明
(15) *Un garçon pleure en ce moment.* 男の子が今泣いている。 — 未知の主題 既知の説明
(16) *Le garçon pleure en ce moment.* (その)男の子は今泣いている。 — 既知の主題 未知の説明

四 日仏語対照研究の試み

筆者がとなえる解釈Cに基づいて考えると日本語とフランス語との相違が明らかになってくる。

日本語のハとガの機能を再考してみると、格助詞性を帯びたハと、係助詞性を帯びたガは、連鎖的な関係を表わす代りに限定を表わすようになって、パラディグマティックな対立を見せるようになる。この現象は、ハとガが二つの異なるレベルに由来しているという事実による。(即ち、ハは本来、「主題部・説明部」のレベルに、ガは「主述関係」のレベルに由来する。)

次の表は、仏語の冠詞と、日本語の助詞の働きの共通点と様々な相違点を明らかにするいくつかの対照的特徴を示している。

図 5

対照される単位 / 対照の基準	フランス語の冠詞 (定冠詞・不定冠詞)	日本語の助詞 (ハ・ガ)
格を表わす	−	±1
限定を表わす	+	−
所有・指示との競合	−	+
修飾語につく	+	−
行為・状況分節につく	+	±1
名詞化する	+	−
主題化する	+	+

五 SN¹ wa SN² ga STATIVE PREDICATE は二つの主語をもつ構造か?

まずこの章の本題にはいる前に、日本文と仏文の次の例文を比較してみたい。

(17) Cet homme est large d'épaules.
(18) この人は肩が広い。

この二文の本質的な相違は、文(17)の d'épaules が属性形容詞 large の補語であるのに対し、文(18)の「肩が」が述語「広い」の主語であるということにある。一般に、フランス語には繋辞 (la copule) が存在し、日本語にはそれが存在しないという点を重要視しがちだが、実際は、インド・ヨーロッパ語族に於ける、主述関係を特色づける数や人称の一致の問題が、より重要なのである。

このフランス語の Cet homme と日本語の「この人は」の統辞論的な働きを説明する前に、日本語のガの変遷を通時的な立場から見てみたい。筆者の研究によると、古典日本語に於けるガとノの区別は、挿入の仕方にある。

(19) 我が行く人 ((SN→SV)→SN²)
(20) 此の行く人 ((SN→(SV→SN²))

この研究におく仮定は、標準語に於いて、現代のノとガの区別が、被限定語 SN² の消去によって現われてくる、ということである。昔、属格の働きをもったガの新しい機能は、一つだけではない。E・バンヴェニストが述べたように、属格は種々の役割をもつ格である。その中には、主語、目的語などがある。ガが属格としての機能をもつ間は、仏文(17)と日本文(18)の統辞論的な構造は同類であったといえるが、「ガ」が属格としての機能を失った時に、その属格のすべての潜在的価値が表面に現われたのである。いうまでもなく、その中には主語や目的語などの価値がある。

右の通時的な立場に立った考察は、日本文(18)の統辞論的な構造を明らかにするとみなすことができる。もちろん、文(17)・(18)が同じ構造を所有する限り、すなわちガが属格を表わす限り、この二文は比較可能であったが、現在、それぞれの文の Cet homme と「この人は」の機能は、共時的な立場からみると、同じ(主語を表わすこと)ではないに違いない。一部の研究者は、日本文(18)の「この人は」を総主語と、又、その他の研究者は、これを主題とみなしている。そして、前者の説明では、主題(主題化)という問題にはほとんど触れない。反面、後者の解釈では、主題化の問題を重要視し、総主語の問題には触れない。

筆者がハとガの対立を論ずる時、ハは主題の働きを、ガは主語の働きだけをもつとはみなさない故、日本文(18)の「この人は」は、総主語 (H・マエスが呼んだ〝循環主語〟sujet récurrent) でもあり、主題化された総主語でもあり得ると考える。単純な (neutre) 総主語であるか、主題化された (topical) 総主語であるかを明確にしたい時は、イントネーションを用いなければならない。書きことばに於いて、「この人は」の後に句点をつけた場合、これを主題化された総主語とすることもある。

意味論の視点から見ると、総主語と小主語の関係は、全体と部分との関係に基づく問題であるといえよう。いうまでもなく、「本質総主語と状況総主語」の区別をしなければならない。

(21) 象は鼻が長い。(象は=本質総主語)
(22) 東京は野菜が高い。(東京は=状況総主語)

当然の如く、SN¹ wa SN² ga STATIVE PREDICATE という構造を、

総主語+ [小主語+述語]

として常に扱うことはできないだろう。総主語を含む文の構造を〝非循環構造〟をもつ文と呼ぶなら、そうでない文の構造を〝非循環構造〟として扱うことができる。この〝非循環構造〟の中には、少なくとも三つの構成をみとめることができる。

(23) 太郎は英語がわかる。（主語＋（目的語＋述語））
(24) あの子は猫がこわい。（主語＋（原因語＋述語））
(25) 彼は歌がうまい。（主語＋（拡張語＋述語））

その他、循環構造でも、非循環構造でもないものに、凝結統辞法（syntaxe figée）がある。例えば、

(26) 彼女は耳が遠い。〔主語＋述語（耳が遠い）〕

六 結論

拙稿では、〝狭い〟視角と〝広い〟視角により、異ったアプローチ（解釈A・B）があることを示した。筆者のアプローチ（解釈C）では、その両方の視角からみた格助詞と係助詞がなす体系が、二つの分野に分けられるようになった。その一つは、体系の中央をなすハとガの二次的両側対立で、もう一つは、体系の周辺にある他の助詞の対立と働きである。即ち、ハとガが範列的両側的な関係にはいった為に、このハとガは名詞句の体系の中央をなし、機能も変わった。

通時的な立場からみると、ガが果たす機能（属格を出発点とした）を拡張し、ハがその機能（対比を出発点とした）を縮小したという事実をみとめることができる。

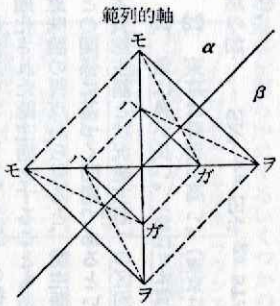
一般に、主題と主語の間の連帯性は、発話行動に於いて最も強くなるといえよう。例えば、文の目的語を主題化したいときに、その文に受動態の形を与えなくてはならない。

(27) この作家を、皆、よく知っている。（能動態）
(28) この作家は、皆によく知られている。（受動態）

能動の文(27)の目的語が、受動の文(28)の表層構造で主語となった為に、主題化が可能となることもある。

ハとガの対立の現われは、やはり主語と主題の基本的連帯の傾向によるものであるといえよう。その結果として、ガは連辞的関係（機能）を失い、ハは範列的関係（働き）を失うようになってきている。と同時に、体系の周辺にある他の助詞も、中央にある助詞と同じように多数の対立にはいるようになった。

図 6



領域α／βの区別は、体系の中央の軸の移動により現われてくる。

体系の中央が一般化されるならば、日本語の助詞体系は、膠着体系から屈折体系に変わるであろう。

次頁にハとガの価値の比較図を示してみよう。（図7）

このような形をとっていく、体系の中央部を特徴づける対立は、意味に頼らずにはなくすことのできないあいまいさを生む原因となった。

(27) a＊この学校は行われる。（主題のあいまいさ）
(27) b この学校は芝居が行われる。（主語＝芝居）
(28) a＊太郎は花子が勉強した。（ト格のあいまいさ）
(28) b 太郎は花子が一緒に勉強した。（ト格＝太郎とは）

図 7

	ハ	ガ
同類の働き 1	(小) 主語	(小) 主語
2	総主語	総主語
3	主題	主題
類似の統辞論的機能 4	(主題化された) 目的語	目的語（例・AはBが好きだ）
異なる価値 5	ガとヲ以外の格助詞の主題化	原因語
6 対比		拡張語

しかし、いつの日か、日本語の統辞論に於けるあいまいさが、生成文法論者により解明されることを祈りたい。

なお、この研究の一部は、フランス国立科学研究センター、及び、日本国際交流基金の援助のもとに、一九七八―九年に書かれたものである。

〔注〕

(1) このような関係は、形態論理学に於いて「ブーメラン関係」と名付けられている。

(2) これは二次的な奪取対立として扱えるかも知れない。この場合、ハは主題として有標の項で、主語として無標の項であろう。一方、ガは主語として有標の項、主題として無標の項であろう。

(3) 松村明『江戸語東京語の研究』東京堂、一九五七年

(4) 尾野秀一 *JAPANESE GRAMMAR* 北星堂書店、一九七三年

(5) 『言語の科学』第2号、東京言語研究所、一九七〇年十一月三十日発行

(6) 三上章『日本語の論理―ハとガ―』くろしお出版、一九六三年第一版

(7) 久野暲はこれを対照と呼んだ。註5参照

(8) 「ガ」の用法に「総記」と「叙述」の二種があることは黒田の分析に基づく。黒田成幸、'Generative Grammatical Studies in the Japanese Language' マサチューセッツ工科大学博士論文、一九六五年。

(9) 図4の典型的な係助詞が範列的な関係をもつには違いないが、「コソ＋ハ」と「サエ＋モ」が不可能なわけではない。このような連鎖は、時には冗長であったり、時には補足的であったりする。それに対し、「コソ＋モ」と「サエ＋ハ」はいうまでもなく非文法的である。

(10) 古典日本語では、日本文(9)は「この人は肩ゃ広し」の形をもっていた。この〝ゃ〟の役割は、属格であって「ガ」もそこに含まれ易かった。

(11) 'Le fonctionnement syntaxique du syntagme nominal japonais. (systèmes casuel et relationnel)', in: *Travaux du groupe deli nguistique japonaise* Vol. IV, Université de Paris VII. 1977

(12) E. BENVENISTE; 'Pour l'analyse des fonctions casuelles: le génitif latin" *LINGUA*, Vol. XI. 1962 Amsterdam

(13) Hubert MAES, 'Presentation syntaxique du Japonais standard,' in: *Travaux du groupe de linguistique japonaise* Vol. III, Université de Paris VII, 1976

(14) 状況総主語も時制・場に二分化できるが、時制に於ける状況総主語の方が機能が弱い。

(15) 筆者がとなえた日本語の循環構造の起源はこの循環構造とフランス語の属性述語に基づいた構造との比較対照の中に見出すことができる。しかし、いわゆる循環構造の起源が一つしかないわけではない。例えば、後置の被限定語に付く付属を示す語尾により特徴づけられるNganasa 語（サモイエド方言）では、循環構造の深層には、日本語と違う構造が流れている。日本文「この狐は尾がふさふさしている。」をNganasa 語に直してみると

tami tunty taibuzu
この きつね 尾(付属を示す語尾) ふさふさしている。
限定語 被限定語 小主語 (小) 述語
総主語 総述語

となる。だが、この Nganasa 語の文は日本語の「この狐は尾がふさふさしている。」と「この狐の尾はふさふさしている。」という文の中間的構造をもっているのではないかという疑問がおこる。

(A. Wlodarczyk・言語学・パリ第七大学)